

二〇二二年五月二六日

遠蛙水田は雨に烟りけり
燕来る維新息づく古町に
寺守の箒に掛かる落し文
地図広げ古町辿る薄暑かな
黎明のしじまを破る時鳥

よし子
有香

うつぎ
ひかり
三刀

二〇二二年五月二五日

瀧落ちて夜半の句碑にしぶきけり
滝道を塞ぎし岩に謂はれかな
老木の今に生家の柿若葉
老鶯の名調子聞く深山道
大滝の威に佇つ人らみな寡黙
恙なく歩ける至福若葉風
推敲の句帳に止まる川とんぼ
綾なすは水のせせらぎ谿若葉
大岩の天蓋なせる若楓
ウインドに威儀正しけり街薄暑
山椒魚岩とみまがふ面構へ
行くほどに洩れ日うごめく滝の道

うつぎ
満天
はく子
こすもす
ひかり
宏虎
ひかり
よし子
ぼんこ
きづな
菜々
菜々

二〇二二年五月二四日

木漏れ日を縫ひて紛るる糸とんぼ
懸崖に広がる風の羊歯涼し
山椒魚岩を盾とし身じろがず
溪流に少女の素足まぶしかり

よし子
せいじ
はく子
せいじ

二〇二二年五月二三日

瀬の楽に和して遠音の河鹿笛

有香

志士の碑によき陰なせる花楓
十重二十重山路を覆ふ若葉影
溪の道トンネルなして若楓
青葦の舟路を狭めそよぎけり
見えそめて樹間に白き一瀑布
少女等の黄色い声や水遊び

よし女
はく子
菜々
雅流
わかば
こすもす

二〇二二年五月二二日

夕日落つ代田見守る影法師
緑陰に園児のうたふ童歌
手びねりの湯飲みに新茶汲みにけり
ゆくりなく古寺に虚子句碑新樹光
菜園は夫の生きがひ花胡瓜
縦横に軽トラ走る麦の秋

よし子
三刀
満天
ひかり
菜々
さつき

二〇二二年五月二二日

葉洩れ日のいまし日食映しけり
弓なりに波打ち返す青葉潮
夏雲を脱ぎて金環日食現る
東の間を金環となる若葉影
青嵐特急電車通過駅
蝕進む日に夏雲の往来す

こすもす
三刀
宏虎
せいじ
ひかり
はく子

二〇二二年五月二〇日

天地人なして噴水あがりけり
桐の咲くダム湖に古りし望郷碑

ともえ
うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二二年五月二九日